

研究課題	実社会における生徒の自由で主体的な調査，交流，探究，表現等を重視した個性化教育カリキュラムの開発
副題	～生徒と教師と大学，地域の教育資源をつなぐ ICT 環境の活用を通して～
キーワード	個の学び ICT の活用 探究 ゼミ オンライン 学習ログ 教科の学びの統合
学校/団体名	国立大学法人香川大学教育学部附属高松中学校
所在地	〒761-8082 香川県高松市鹿角町 394
ホームページ	https://www.tch.ed.kagawa-u.ac.jp/

1. 研究の背景

本校では、これまで地域や社会と直接関わる体験的な活動をカリキュラムに組み込み、多様な外部団体と交流してきた。しかし、その活動も教師主体によるものが多く、必ずしも生徒一人一人の興味・関心に寄り添ったものではなく、協働で行うことが多いため、個の力が十分に伸びきらなかった。一方で、主体的に実社会との接点をもつ経験をした生徒は、次々と課題を見つけ解決し、個の力を伸ばすことができた。そのため、生徒一人一人に主体的な活動を保証し、個の力を伸ばすことをねらいとし、研究を行った。

2. 研究の目的・内容

生徒一人一人が興味・関心をもとに課題を設定し、探究を行うことで、個の力を伸ばし、学び続ける生徒になることを目指す。また、電子データとして記録を蓄積することで、自分の学習記録を俯瞰的に捉え、調整することでよりよい学びを追究できる生徒を目指す。

本校では、学年集団による「協働の学び（生徒主体のプロジェクト型の学習と自己の生き方・在り方を問い直す省察の時間）」と個人による「個の学び（自由な探究活動と異学年集団によるゼミ）」を編成した新領域「MIRAI」を開発し、実践している。

MIRAI の個の学びでは、生徒が自分の理想像を定めた上で、興味・関心をもとに「答えのない問い」を設定し、実社会の中で自由で主体的な調査，交流，探究，表現等を行う。その際、各教科での学びを生かし、課題解決を図ることを目指す。また、ICT を有効に活用し、情報の収集や整理，表現等を行う。加えて、異学年集団と教師，大学生，学校外の人たちと自分の探究について意見交換する場「ゼミ」を対面やオンライン上で開催し、視点の獲得や学びを深める機会を確保する。最終的には、個の学び発表会で自らの探究活動の成果を表現する。

3. 研究の経過

	時期	職員研修等	個の学びの活動内容	評価方法
1 年 次	4月	<ul style="list-style-type: none"> 令和4年度研究内容について アドバイザーとの打ち合わせ 		
	5月	<ul style="list-style-type: none"> 個性化教育カリキュラムの骨子の作成 		
	6月	<ul style="list-style-type: none"> アドバイザー訪問① 学習ログの作成 	<ul style="list-style-type: none"> ガイダンス 	

	時期	研修等	個の学びの活動内容	評価方法
1 年 次 (2 0 2 2 年 度)	9月	・ゼミについて	・第1回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	11月	・アドバイザー訪問② ・ゼミについて	・第2回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	1月	・ゼミについて	・第3回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	2月	・発表会について	・3年個の学び発表会	・振り返りシート
	3月	・発表会について	・1, 2年個の学び発表会	・振り返りシート
2 年 次 (2 0 2 3 年 度)	4月	・令和5年度研究内容について	・ガイダンス	
	5月	・学習ログの改良	・課題設定のための調査, 交流, 探究	・課題設定シート ・ゼミアンケート
	6月	・アドバイザー訪問③		
	7月	・ゼミについて	・第1回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	8月	・ゼミグループ分け	・調査, 交流, 探究	
	9月	・アドバイザー訪問④	・第2回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	10月		・調査, 交流, 探究	
	11月	・発表会について ・アドバイザー訪問⑤	・3年個の学び発表会	・振り返りシート ・アンケート
	12月	・ゼミについて	・第3回ゼミ	・中間報告書 ・ゼミアンケート
	1, 2月		・調査, 交流, 探究	
3月	・発表会について	・1, 2年個の学び発表会	・振り返りシート	
通年		研究集会 (毎週水曜日)		

4. 代表的な実践

(1) 探究方法と各教科とのつながりの可視化

ゼミを開催するごとに、それまでの期間における探究の進捗状況をまとめた中間報告書を作成させた。中間報告書には、自分が課題を解決するために行ったことを書き出し、その活動がどの教科の学びと関連しているかを生徒自身が分析できるような項目を設けた(図1)。記入に際して、「行ったこと」は必ず記入するようにし、「生かした学び」「教科名」については、関連があれば記入することとした。また、複数の教科が関連する場合は全て記入することも条件に加えた。

3. 探究を進める上で行ったことと教科とのつながり		
・これまでの探究でやったことについて、教科などで学んだ内容との関連があれば記録しよう。		
行ったこと	生かした学び	教科名

図1 中間報告書(一部)

(2) 多面的な思考や視点を獲得させるゼミ

① 課題設定のための第1回ゼミ

個の学びにおける課題を各自が第1回ゼミまでに考え、設定させた。その課題が1年間学び続けられるものか、答えのない問いであるか等の基準から、より自分の理想像につながるよう

な問いとなるよう、意見交換の場を学校にて対面形式で行った。この段階では課題設定について多様な意見に触れる機会を確保するため、ゼミのメンバーの編成は、各学年6名ずつの異学年集団と教師に加え、アドバイザーとしてボランティアの大学生2～3名で編成した（図2）。



図2 第1回ゼミの様子

② 探究活動の中間報告を行う第2, 3回ゼミ

中間報告及び意見交換について、空間的かつ時間的制約を超えて交流するためオンラインでゼミを実施した（図3）。生徒自身が探究の流れを筋道立てて説明する際、それぞれの個性を発揮するために、口頭伝達、プレゼンテーション、映像等、各自で発表方法を選択、決定させた。また、2年次は、アドバイザーからの助言をもとに、質疑応答や意見交換が活発に行われることをねらい、課題をジャンルで分け、ゼミを開催した。具体的には、生徒が設定した課題及び探究で扱う題材の性質等进行分析し、4つのグループに分類した。その上で、同じグループに分類した生徒同士でゼミを編成した。6人編成を基本とするが、異学年集団とするため、各学年1名を必ず含むことを基本とした。



図3 第3回ゼミの様子

（3）学習ログ（電子データ）のパッケージ化

1つのエクセルファイルに個の学びに関するワークシート6枚を全てまとめてパッケージ化し、生徒のGIGA端末に配付することで、それぞれのタイミングで学びを記録、提出できるようにした。6枚の内訳は、①課題設定シート、②計画書、③中間報告書（9月）、④中間報告書（12月）、⑤発表会資料、⑥振り返りシートである。端末に残した学習ログをもとに、個の学びを通して自分の理想像にどれだけ近づけたかを振り返ることで、自らの学びを俯瞰し、高め続けていく姿勢を身に付けられるようにした。

（4）ICTを有効に活用するための取組

生徒が日常的に安全にGIGA端末を活用するICT環境を実現するために、以下の取組を行った。

- 調査、交流、探究の時間における学校内外でのGIGA端末を用いた情報収集の機会の確保
- 学習ログやプレゼン資料の提出及び個の学びに関する周知のオンライン化
- 先行研究や文献の引用における表記方法（著作権物を利用するための対応）の周知
- Web会議サービスの活用推進
- ゼミや発表会におけるICT機器の接続等の生徒による準備

5. 研究の成果

(1) 各教科での学びを生かした課題解決

ほとんどの生徒の中間報告書の記載から、探究活動を進める上で行ったことと、教科の学びとのつながりを可視化している様子が見えたと感じた。その多くは単一教科とのつながりに関する記載であったが、一部の生徒の記載内容からは、複数の教科の学びを統合して活用している姿が見られた(図4)。

行ったこと	生かした学び	教科名
インターネットで情報収集する際、必要なものとそうでないものを選別した。	情報の収集、選別	国語 社会
色んなサイトで目を引かれた画像の共通点を探した	集合論、色彩や構図	数学と美術
データの収集及び整理	どのようなデータを集めるのか、またどう整理するのか	数 学 理 科 技 術
アンケートを取る	①必要となるキーワードをメモ ②割合を出す	①国語 ②数学

図4 複数の教科の学びを統合したと分析する記述内容(複数の生徒の中間報告書から抜粋)

これらのことについては、アドバイザーからも、自己のカリキュラムマネジメントの3側面内の「教科横断的かどうか『自分の探究に各教科等の知識や技能、経験等が活用されているか』」に即して行えているとの評価をいただいた。

(2) 多面的な思考や視点を獲得するゼミ

第1回ゼミ実施後の生徒アンケートによれば、ゼミが充実した時間になったとの回答が89.3%であった(図5)。その理由として、「大学生から探究方法を教えてもらったから」「自分にはなかった考え方に触れることができたから」「他者の課題が自分とは全く違ったものであり、学びにつながったから」等が挙げられた。第3回ゼミ実施後の自由記述には、「アドバイスをもとに探究の方法を変えた」「客観的に評価する方法をメンバーに聞いてみて、それを参考にして探究を進めた」等、ゼミでの意見交換が探究活動を広げたり深めたりしていることがうかがえた(図6)。これらのことについては、アドバイザーからも自己のカリキュラムマネジメントの3側面内の「人的・物的資源の活用」に即して行えているとの評価をいただいた。

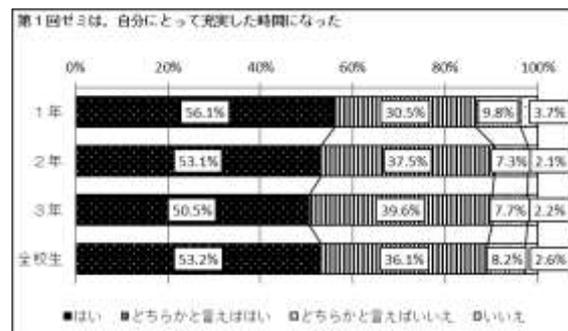


図5 第1回ゼミ実施後のアンケート結果

- ・第2回ゼミでのアドバイスをもとに探究を行ったことで課題に対しての考えが深まった
- ・アドバイスをもとに探究の仕方を変えた
- ・客観的に評価する方法をメンバーに聞いてみて、それを参考にして探究を進めた
- ・新たな考えが出てきたため加えて解決する
- ・新たな課題について、似ている課題の人に聞いてみたりした

図6 第3回ゼミ実施後の自由記述

(3) 自己を見つめる機会を促す手立て

「個の学びで自分自身の行動や考え方を調べ直したか」を問うアンケート調査では、76.4%の生徒から肯定的な回答が得られた(図7)。また、このアンケート結果を生徒に示し、考察させたところ「自分でテーマ(課題)を設定したから、自分自身について考えることができた」や「一度上手く計画的にできなかったり、間に合わなかったりする等、自分の行動を見直

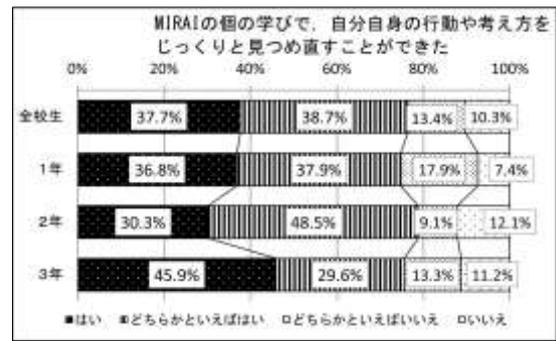


図7 アンケート結果

すきっかけとなったから」という内容があった(図8)。これは、課題を設定する際に、自分の理想とする姿や興味・関心を抽出させたり、ゼミや発表会ごとに、それまで行った探究活動を振り返らせ、探究の進捗状況を把握させたりしたことの効果だと考えられる。実際に、ゼミの際に提出させたワークシートを見ても、計画通りに進んだ場面もあったが、計画通りに進まなかったという記述

<p>40 第3学年</p> <p>自分の理想とする姿や興味・関心を抽出させたり、ゼミや発表会ごとに、それまで行った探究活動を振り返らせ、探究の進捗状況を把握させたりしたことの効果だと考えられる。実際に、ゼミの際に提出させたワークシートを見ても、計画通りに進んだ場面もあったが、計画通りに進まなかったという記述</p>	<p>40 第2学年</p> <p>自分の理想とする姿や興味・関心を抽出させたり、ゼミや発表会ごとに、それまで行った探究活動を振り返らせ、探究の進捗状況を把握させたりしたことの効果だと考えられる。実際に、ゼミの際に提出させたワークシートを見ても、計画通りに進んだ場面もあったが、計画通りに進まなかったという記述</p>
<p>1. 現在の進捗状況</p> <p>これまでの探究で分かったことやできるようになったこと、うまくいかなかったことを振り返ろう。</p> <p>インターネットで調べて、自分の予想(仮説)と比較することができた。</p> <p>実験はうまくいかず、できていない。</p> <p>インタビューを少しの人(目標の人数より少ない人)にしかできていない。</p>	

図8 生徒の考察及びワークシートの記載内容(抜粋)

が見られた(図8)。つまり、ICT機器に残した学びの軌跡をもとに、自分自身の行動や考え方を振り返らせることで、自らの学びを俯瞰し、高め続けていく姿勢を身に付けることができたと考えられる。また、振り返りシートからも、自己の学びを振り返る記載が見られた(図9)。

・私は、個の学びで自己探究の課題を設定し、自分を見つめ直すきっかけとなった。普通に生活していたら考えないような問いを立てて、自分で工夫しながら問いを発展させたり答えを自分なりに導き出したりすることは、今後自ら問題を解決する時に大切になる。個の学びを負担に感じることもあったが、最後は自分なりに考えるという達成感を得ることができた。課題解決をしていく中で面白さを感じた場面もあったので、経験の幅を広げることができた

・自分でわからないことを見つけ出して解決に向かうという流れを自分なりに行うことができたので、今後役に立つと思う

・個の学びの結果で、自己について知ることができたので、新しい人と会ったり、自己紹介したりするときに活用したい

図9 ある生徒の振り返りシートの記載内容(抜粋)

これらのことについては、アドバイザーからも、自己のカリキュラムマネジメントの3側面の中の「PDCAサイクルの見直し・改善(それぞれの課題に取り組む中で、見直し、改善を図っているか)」に即して行えているとの評価をいただいた。

(4) 調査、交流、探究、表現等を行うためのICTの有効活用

探究を進める中で、多くの生徒がICTを用いてアンケート調査を実施したり、調査結果をパワ

一ポイントにまとめたりする様子が見られた。ここでは、特に顕著に活用した生徒の取組を紹介する。ある生徒は、ガザ地区関連のニュースを例に、同じ土壌に立つ人々の中で勢力が二分されることに疑問を抱き、民族意識がどのように形成されていくのかという問題提起から、課題を「辺境（グレーゾーン）の民族意識はどのように形成されるのか」と設定した。ある生徒は、民族意識を『私は、ここに属している』と思える集団意識」と定義して探究を進めた。現代社会で見られる事象を一般化・理論化して明らかにするために、ガザ関連地区で調査することはできないので、地理的にも歴史的にも文化や経済の結節点であり、自身の居住地でもある身近な小豆島を取り上げた。小豆島の人々は、自身がどこに所属していると自認しているのか。複数の仮説を立て、まずは量的調査を行うこととし、移動先、食文化、環境（親族の居住地）、政治的関心、方言についてオンラインフォームで調査した。90件の小豆島に住む人々からの回答を得ることができ、その関連を考察するなど、ICTを最大限に活用し、教師の想像を超える探究を行った（図10）。



図10 ある生徒の検証及び調査結果の考察をまとめたプレゼン資料（一部）

6. 今後の課題・展望

ICTを活用し、情報の収集や整理、表現等を行うことは、個人での探究に大変有効であった。特に、実社会とつながる課題を設定し探究した生徒は、一次データを取得したり、分析・活用したりすることができた。ただ、中には、探究の成果が調べ学習のレベルでまとめられている生徒もあり、ICTを有効活用するためのよりよい手立てを考えていく必要があると感じた。

また、年間計画を再検討することも視野に入れたい。個の学びのゴールイメージを年度初めにもち、個の学びの目的やよさを実感できるよう、上級生の発表会の実施時期を検討することや、主体性を高めるための調査、交流、探究、表現等の時間の配置について検討していきたい。

7. おわりに

自分の好きなことを突き詰める生徒の生き生きとした姿が見られたことは、個の学びの何よりの成果である。生徒にとって答えのない問いに本気で向き合った経験は、今後、新たな価値を生み出したり、今まで解決できなかった課題や困難を克服したりする一助となるであろう。パナソニック教育財団の実践研究助成を受け、この研究を実現することができたことに心から感謝の意を申し上げる。

8. 参考文献

- ・ 白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来 ―エージェンシー、資質・能力とカリキュラム―』ミネルヴァ書房 2020
- ・ 村川雅弘『子どもと教師の未来を拓く総合戦略 55』教育開発研究所 2021